ネギま　千の呪文を継ぐ者

なのは四期アニメ化希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま　千の呪文を継ぐ者

【Ｎコード】
Ｎ５５２４Ｙ

【作者名】
なのは四期アニメ化希望

【あらすじ】
転生してネギの兄に！？あるあるだな…まあ、この世界で精一杯生きてやる！！

「二番煎じ」じゃ済まされない！「千番煎じ」ぐらいかな…？
『黒い月の聖王』を書いている途中に思いついたかなりの駄文です。

プロローグ（前書き）

無茶苦茶ですが許して下さい。なので細かい事は気にしないで下さい。マジで。

『黒い月の聖王』がメインなのでゆっくりです。

プロローグ

「あんた誰だ？」
俺は目の前にいる少女に質問する。
「私は神様なのです。えっへん！」
「…頭沸いてんのか？」
「違います！ホントに神様なんです！」
かなり必死だな…
「まぁ、いいや。それよりここ何処だ？周りが本棚で囲まれた図書館っぽいが…」
「良くないです！本当なんですって！」
しつこいな、此奴…
「ここは何処だか聞いてんだけど？」
「う～、ここは世界の全てが記録されている場所、まぁ分かりやすく言えば、型月の『根源』や、某仮面騎士の『星の本棚』みたいな所である。」
「…頭沸いてンのか？」
「また同じ事言われました！？しかも今回は一方通行っぽいし！」
「いや普通の反応だろ。」
「むむむ…分かりました！証拠を見せるです！
何が見たい？」
「そこはお前が決めるとこだろ！？」
「確かにそうですね…じゃあ、これ。」
そう言って俺の恥ずかしい過去の映像を映し出す…って、
「テメェ…何でこんなことを知ってんだ…？」
「神様だから。」
なんか色々疲れた…
「もういいや…」
「そうですか？じゃあ本題に入りますです。」

「いきなり声のトーンが落ちたな。」
「貴方は選ばれた。」
いや意味わかんねぇ。
「理由は…秘密です。ここまでで質問は？」
「有りまくりだ！！」
「そうですか…無いですか。」
「有るって言ったの聞こえなかったのか？」
「貴方は転生することになりました！」
無視か！！
「って、転生！？」
「はい。転生する世界はランダムで決まる！あっ、能力も三つまで聞いてあげられますですよ。」
「…いきなり二次創作的展開…」
まぁ俺もそう言うのに興味が有るけど。
「取り合えずどんな世界かだけ教えろ。」
「まあ少しだけなら…剣と魔法の世界…に近いです。」
に近い！？剣と魔法の世界では無いのか！？
「じゃあ、能力三つあげてください。」
「どうせ抗議しても無視するんだろ？分かったよ…
一つ目は魔法の才能。二つ目は魔法具を作る才能。
……これ以上浮かばない無いな。」
「えぇ！？チートじゃ無いですよ！？それに後一つは！？」
「じゃあ必ず転生後、男にしてくれ。」
「…分かりました。…詰まんないので勝手にいじろっと。」
「聞こえてんぞ！！」
「前世の記憶は自我が生まれると戻ります。」
また無視かよ…
「ちっ、まぁいい。後一ついいか？」
「何ですか？」
「俺の家族を幸せにしてくれ。」

「もちろんです。ではいってらっしゃい。」
神様？がそう言うと意識が遠のいて行った。

「えっと～彼が逝く世界はこれだから、設定は……」

あのフザケた転生から4年、自我が芽ばえて2年がたった。
俺の新しい名前は、アスカ。
父親はナギ・スプリングフィールドで、母親はアリカ・アナルキア・エンテオフィシュア。
両親の名前で分かるように、かの有名な漫画『ネギま』の世界…しかも主人公の兄の立場…死んだな、コレ。
原作では分からなかったが、2人共かなりの親バカらしい。俺の急成長を全く不思議に思っていない所か、むしろ大歓迎している。
調べてみて分かったのだが、あの自称神様は才能をかなりいじったらしい。その所為で魔法も適正がおかしい。
全属性普通以上、中でも雷と火はずば抜けている。
魔法学校に通わず、親父に風と雷、母さんに火と光の魔法を習っている。
才能のお陰で、雷は『千の雷』まで出来る。最近は『王家の魔力』の使い方も習い始めた。
家は京都にある隠れ家か、魔法世界の隠れ家を使っている。
時期はいまいちよく分からない。少なくとも大戦後でエヴァが呪われる前な事は確かだ。
取り合えず生き残るために力を付けよう。

闇の福音

「おらっ！『雷の暴風』！！」
「無詠唱かよ！
【解放！】『奈落の業火』！！」
現在、俺は親父とわりとマジで戦っている。
「お返しだ！
【プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い、我に従え、高殿の王！来れ、巨神を滅ぼす、燃ゆる立つ雷霆！百重千重と、重なりて、走れよ稲妻！】『千の雷』！！」
「マジかよ！えっと…
【百重千重と、重なりて、走れよ稲妻！】『千の雷』！！」
俺の『千の雷』と、親父の『千の雷』がぶつかり爆発を起こす。
「ほらよっと。」
爆発に紛れ、いつの間にか親父が後ろから『雷の投擲』を突きつけてきていた。
「クッソ！またかよ…」
「はっはっは！俺に勝つなんて十年はぇ！じゃあ、メシよろしく！」
「わかってるよ！」
俺は今、親父の旅に御供している。その途中、アル、ガトウ、アスナ、詠春、ラカンとも顔合わせをした。
旅での食糧などの確保は試合で負けた方がするのだが…あまり前だが、いつも俺だ。
まぁ、毎日戦ってるお陰でかなり強くなった。
どれぐらい強くなったかというと、得意属性は全て広範囲殲滅呪文を使え、さらにオリジナルの呪文を創るレベルだ。はっきり言ってチートだ。
…親父に勝てないけど。
ちなみに魔法発動体は、先端がフックみたいになっている短い杖は

『千の雷』取得祝いの親父たちの貰った。

近くの川で魚を釣り、親父の所に戻ろうとしていると…近くの崖から金髪の女の子が落ちた…え？
「Ｗｈｙ何故落ちる！？クソったれが！！」
瞬動を使い一気に近づくと崖の端に片手をかけ、もう片方の手で女の子の手を掴む。
「危ねー所だったぞ！クソガキ！！」
「クソガキだと！！」
女の子が何か言ってくるが無視して崖の上に戻る。
助けた女の子を見て…ってエヴァンジェリンじゃねぇか！？これ本来、親父が助けるとこだろ！？
「貴様は魔法使いだな？何故助けた？」
現実逃避していると何故か凄まれた。
「いや、普通助けるだろ…」
「私はあの程度では死なん！」
とりあえず無視して親父の元に戻る。
「おい！貴様聞いているのか！」
あー何も聞こえない。

「おいアスカ。こいつ誰だ？」
結局エヴァンジェリンはこっちに着いて来やがった。
「捨てられた子猫。」
焚いてある火の周りに釣ってきた魚を刺した棒を立てる。
「貴様…さっきから好き勝手言いおって…私は《闇の福音》だぞ！！」

「えっ何？《夏の風鈴》？」
「もはや原型が分からないじゃないか！？舐めてるのか！？」
そろそろ真面目に話すか。
「…親父、任せた。」
「俺かよ！？」
自分だけ安全圏で笑って居られると思ってんのか？
「はぁ～しょうがないな。で？何が聞きたい？」
「貴様等は誰だ？」
「俺はナギ・スプリングフィールド。んでこっちは息子のアスカ。」
「何！？貴様があの《千の呪文の男》だと！？しかもこっちは息子！？」
面白いぐらい驚いてるな。
「ああ、何ならアスカと戦ってみるか？」
こっちに振りやがった！？テメーはバトルジャンキーだろ！戦えよ！
「お前も今まで、ほとんど俺としか戦ってないだろ？良い経験になるぜ？」
「ちっ…わかったよ。」

「いくぞ！
【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ氷精、闇の精！】」
「いきなり！？
【プラクテ・ビギ・ナル、来れ雷精、風の精！】」
「【闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪！】
「【雷を纏いて、吹きすさべ、南洋の嵐！】」
「『闇の吹雪』！！」
「『雷の暴風』！！」
二つの魔法がお互いを相殺する。その隙に距離をとる。
「凄い才能だな…」

「お褒めに与り光栄だ。」
「しかし…明らか年齢と技術がおかしいだろ…」
そう思いますよね…普通…
「さて少し本気を出そうか！
【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精霊５０１柱！集い来たりて敵を射て！】『魔法の射手　闇の５０１矢』！！」
「ちょっ！多いって！
【プラクテ・ビギ・ナル、九つの鍵を開きて、　レーギャルンの筐より出て来たれ！】『燃え盛る炎の神剣』！！」
アスカは次々と迫り来る射手を落としていく。
「【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い、我に従え、氷の女王！】」
「っ！？
【プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い、我に従え、高殿の王！】」
「【来れ、永久の闇、永遠氷河！】」
「【来れ、巨神を滅ぼす、燃ゆる立つ雷霆！】」
「【全てのものを、妙なる氷牢に、閉じよ！】」
「百重千重と、重なりて、走れよ稲妻！】」
「『凍る世界』！！」
「『千の雷』！！」

結局負けたのは俺だったんだが…めんどくさい事になった。
「今、何つったんだ？エヴァンジェリン？」
「私のものになれアスカ。それと長いからエヴァで良い。」
「…プロポーズ？」
「違うわ！！従者になれと言っているんだ！」
「…丁重にお断りします。」
そう言ってある魔法を発動させる。

「待てアスカ！！俺に押しつける気か！？」
俺の意図に気付いた親父の声を無視して、さっさと炎を使った転移で逃げた。

「と言うわけで、しばらくみんなの所を廻ろうと思う。」
「まぁ…いいじゃろう。」
唐突だけど、俺はナギ達を漫画のキャラでは無く、しっかり両親として見ている。
「何かあったら直ぐ知らせるのだぞ。」
「りょーかい！んじゃあ、行ってくるわ！」
「気をつけるのだぞー」

「と言うわけでしばらくここに居るから。」
「いや、全く意味分からないんだが…まぁ今はタカミチ君は居ないし、いいぞ。」
まずはガトウの所に来た。ちなみにアスナも居ます。
「アスカ…一緒に暮らすの？」
「おう！よろしく！アスナお婆ちゃん。」
「アリカ直伝…」
「はい？」
「…王家のビンタ。」
「ぶべらっ！？」
アスナちゃんの攻撃を喰らい吹き飛ぶ。
「嬢ちゃん…今のって…」
「嫌なこと言われたらやれ…ってアリカが…」
何教えてんの母さん！？

「そうか…」
ガトウ冷や汗掻いてんじゃねぇか…
「ガトウ！頼みがある。」
直ぐに復活して話を変える。
「ん？なんだい？」
よそを見ていたガトウがこっちを向く。
「感卦法と無音拳を教えてくれ！」
「構わないが…お前、感卦法はかなり時間がかかるぞ。それでも良いか？」
「ああ、頼む！」
《完全なる世界》と戦うためには力が要るからな…

闇の福音（後書き）

話の展開が早いです。
アスカの杖は原作でとあるキャラが持っています。

呪文開発（前書き）

かなり無茶苦茶ですが、見逃して下さい。ｏｙｚ

呪文開発

「ガハハハハ！そうか詠春にもガキが出来てたのか！！」
久しぶりに《紅き翼》＆俺と母さんとアスナちゃんが集合して騒いでいる。
「ああ、これでもかってぐらい可愛いんだ！」
キャラ崩壊してんぞ！詠春！！
「うむ！赤子はまるで天使じゃならの！」
なんか母さんと意気投合してる！？
「ジャックはどうなんだ？相手でも見つかったか？」
「んなもん見つかるわけねぇーだろ！」
何で嬉しそうなんだ？
「タカミチは若いから良いよな…」
「しっ師匠もまだ若いですよ！！」
ガトウは落ち込んでてタカミチが必死にフォローしてるし…
「アスカは誰が良いですか？」
アルが俺に聞いてくる。
俺を巻き込むな！！！

あのカオスな騒ぎから一夜明けた。
防波堤の上で、ガトウがタカミチに咸卦法を教えていた。
俺とアスナちゃんは側に座りそれを見ている。
「いいか？左手に魔力！右手に気…」
ガトウが咸卦法をやってみせる。
「左手に魔力…右手に…うわっ！？」
タカミチがガトウを真似て咸卦法を発動させようとするが失敗する。
「ダメだ、ダメだ。いいかタカミチ。自分を無にしろ、そんな調子

じゃ5年は掛かるぞ？」
「ハ、ハイ！」
「…」
それをアスナちゃんが真剣に見つめている。
「よぉ！姫様は今日も元気か？」
そう言いながら親父達が現れる。
「あっナギさん、皆さん！おはようございます！！」
タカミチが慌てて挨拶をする。
「バーカ、タカミチ。ナギさんはやめろっつってんだろ。ナギでいーっての！」
「そうだぞタカミチ、親父はバカだからな。」
「んだとアスカ！もう一遍言って見ろ！」
「なんでもねーよ。」
「何をやってたんだ？」
親父と一緒に来た詠春がタカミチに訊ねる。
「あ、いえっガトウさんに少し修行を…」
「左手に魔力…」
説明しているタカミチの後ろでアスナちゃんが感卦法をやろうとしていた。
「右手に気…」
「おおっ！？」
一発で成功させた！？
そう言えばこんな場面あったな…
「…」
「ハッハッハ！抜かれたなタカミチ君！」
唖然としているタカミチの肩に詠春が手を置く。
「これなら将来良い魔法使いの従者になれますね。」
「ハハハ！嬢ちゃん、オジサンのパートナーになるかい？」
ガトウの言葉にアスナちゃんが首を振る。
そしてこっちを向く。やな予感が…

「…アスカがいい」
やっぱりかぁ！！
「お…！」
「プ…」
親父ィ！何で嬉しそうなんだよ！
そしてアル！笑ってんじゃねぇ！
「良かったなアスカ！！」
「何が良いんだクソ親父！！」
「年齢的には今が一番可愛いですよ？それに見た目は同い年ぐらいですし。」
「ロリコン有害指定図書は黙ってろ！！」
「やっぱりオジサンは嫌かー」
「アスナちゃんはタバコが嫌いなんですよ…」

あれから数日間騒ぎ倒し解散する事になった。
「んで？アスカはどうするんだ？」
親父が聞いてくる。
「ああ、無音拳と感卦法は一様取得できたし…アリアドネーの魔法学校にでも行こうと思ってる。この前セラスに誘われたしな。」
「アスカ…一緒に来ないの？」
「三、四年ぐらいしたら合流すよ。」
「分かった…」
アスナちゃんが頷く。
「んじゃあ解散だな！みんな元気にしろよ！」
親父の声に返事をしてみんなと別れた。

炎の転移を使い校長室に侵入する。
「うーす！セラス居るか？」
「…いきなり転移して来ないでくれないかしら？毎回ビックリするのよ…」
セラスが疲れたように言う。
「わりーわりー。」
「はぁ…で？どうしたの？」
「この間のお誘いを請けようと思ってね。」
「ホント！？」
セラスが突然席を立つ。
「ああ、新呪文を幾つか完成させたいんだ。」
「…また作ったの？まぁ良いわ。
一様、立場としては特待生で良いかしら？」
「ああ、それで頼む。」
「すぐに部屋を用意させるわ。」
「サンキュー。」

用意された部屋は普通の生徒用と同じものにして貰った。
荷物の整理が終わると直ぐに図書館に向かった。
「まずは『太陽の如き剣』と『雷霆の槍』を完成させて…アレ？必須魔法一覧に『雷撃武器強化』が無い…『氷結武器強化』も無いな…」
原作では綾瀬夕映が使ってたし…ちょっと気になる…
「よし！探すか。」

「無いな…」

調べた結果、何処にも書いてい無いことが分かった。
「…俺が作るか？」
面白そうだし…やるか！
「どうせなら全属性作ってやろう。」
完成したら術式はセラスにでも渡すかな。

アリアドネーに来てから四年ほど経った。新呪文の開発は順調に進んでいる。
今は新たに完成した呪文を試そうと近くの森に来ている。
「う～ん…ちょうど良い魔獣はなかなか見つからないな…」
一人でぼやいていたその時、
「きゃあッ！？」
「ん？」
目の前に黒い短髪の少女が飛び出してきた。
さらに…
「ＧＡＯＯＯＯＯＯ！！」
火竜も出て来た…何で！？
「ひぃ！？」
女の子に向かって爪が振り下ろされる。
「チッ！」
とっさに縮地クラスの瞬動を使い女の子を助け出す。
「大丈夫か？」
「へ？あっはい…」
女の子は唖然としながら返事をした。

ｓｉｄｅ　少女

普段なら入っては行けない森だけど私は興味本位で足を踏み入れてしまった。
運が悪く竜種の中でも中の下クラスの火竜に見つかり追われていた。
「きゃあ！？」
木の根に足を取られ倒れてしまった。
「ひぃ！？」
振り上げられた爪に目を瞑ってしまう。
しかし衝撃は来なかった。
恐る恐る目を開けると英雄ナギ・スプリングフィールドに似た少年の腕の中にいた。
「大丈夫か？」
「え？あっはい…」
唖然としながら答える。
「少し此処で動かないでね？」
そう言うと私を地面におろし結界を施した。
「ちょうど良い相手だな…
【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク、我が手より昇れ、閃光の如き輝く稲妻！】」
彼は今まで一度も私が聞いたことのない呪文を唱える。
「『天に墜ちる雷』！！」
呪文が完成したと同時に、彼は地面に手を付いて言う。
次の瞬間、火竜の足下から上に向かって雷の柱が昇る。
「ＧＵＯＯＯＯ！！」
火竜は苦しそうに叫び声をあげ気絶した。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

なかなかいい感じだな…
呪文も結構作ったことだし、そろそろガトウ達と合流するか…

「あの…」
「うん？」
「ありがとうございます。」
先程の少女が頭を下げる。
「あ～、気にしなくて良いよ。それより此処から帰れる？」
「えっと…その…」
やっぱりか…
「じゃあ総長の所まで連れて行ってあげるよ。」
そう言って炎の転移を発動させ、少女を連れてセラスの元に戻った。

「もう行くの？」
「ああ、また来ると思うから。」
少女の保護者が連れていった後セラスに出て行くことを説明する。
「そう…いつでもいらっしゃい。」」
「ああ、んじゃあ世話になったな。」
そう言って総長室をでた。

呪文開発（後書き）

・天に墜ちる雷

詠唱「我が手より昇れ、閃光の如き輝く稲妻！」

地面から敵の足元などから敵に向かって登る雷。相手が避けにくい

代わりにコントロールが難しい。威力は『白き雷』の数倍。

ＶＳ完全なる世界（前書き）

かなり無茶苦茶ですが、見逃して下さい。ｏｙｚ

本文、並びに後書きの魔法解説を少し編集しました。　１１月２６日

VS完全なる世界

アリアドネーを出て再びガトウと合流した。
少し前に母さんからネギが生まれた、との手紙が来たのでそろそろ親父が行方不明に成る頃だろう…させる気はないが。
「どっち…」
アスナに急かされ現実に戻る。
「右だ！って違った！」
「私の番…」
「さぁ！どっちだ？」
「こっち…」
「負けたー！！」
え？何してるかって？ババ抜きだよ！
「トランプ…しかも2人でよくそこまで騒げるな…」
呆れた顔でガトウが言う。
「2人なのはお前が混ざんないからだろ！ガトウ！」
「私、飽きた…」
「アスナちゃんまで！？」
騒ぐ俺を無視してガトウがイスに座り手紙を出す。
「誰からだ？」
「ナギからだよ。」
「親父から？文字書けたのか…」
「…お前かなり酷いな…」
そう言いながらガトウが手紙を開ける。
「……これは…」
「どうした？いきなり真面目な顔になって。」
ガトウは返事をせず手紙を渡してくる。
「……マジかよ…」
…噂をすれば何とやらってか？…噂はしてないが。

「どうしたの…？」
アスナちゃんが不思議そうに聞いてくる。
「ああ、ちょっとマズいことが書いてあってな…」
ガトウに目配せをして外にでる。
「…行くのか？」
ガトウが訊ねてくる。
「ああ…その為に力を付けたんだならな。」
「奴らは…《完全なる世界》は強いぞ。」
ガトウが諭すように言う。
「分かってる。…アスナちゃんを頼む。」
「それが俺の役目だ。しっかりやるさ。
…気をつけてな。」
「ああ！」
そう言うと、炎の転移を発動させる。まずは母さんと合流だな。

「母さん！」
家に入るといつもの普段着ではなく、漫画で見た戦争中の服を着て剣…『王剣』を側に置き、準備をしている母さんが居た。
ネギは既に預けたのか居ない。
「帰ったのか…」
「ああ、親父からの手紙がガトウの所に届いた。」
「そうか…着いてくる気か？」
母さんが聞いてくる。
「ああ、止めても無駄だぞ。」
「分かっておる。ただの確認じゃ。」
準備が終わったのか王剣をとる。
「行くぞ！まずはアルビレオの所じゃ！」
「了解！」

「見えてきたぞ！」
母さんが叫ぶ。
「あれか…俺は転移で奴らの後ろに回り込む！」
「気をつけるのじゃぞ。」
「【…全ての者を、妙なる氷牢に、閉じよ！】」
確か《水のアダドー》セプテンデキム…だったけ？の詠唱が聞こえる。
「ッ！？妾は先に行くぞ！！」
そう言うと親父の方に行く。いや…多分親父ならアレ喰らっても平気だと思うけど…
って母さんもうちょっとましな助け方無いのかよ…
「きっ貴様は！アリカ！？」
「俺もいるぜ！！」
《風のアーウェルンクス》セクンドゥムの声に付け足しながら、後ろに転移し全力の蹴りを放つ。
「グゥ！？」
魔力強化をした蹴りをモロに喰らいセクンドゥムが吹き飛ぶ。
「アスカまで来たのかよ！！」
親父の声を無視して、小さいアーウェルンクス…フェイトに攻撃を仕掛ける。
「まさか《千の呪文を継ぐ者（サウザンドマスター・セコンド）》まで来るとはね…」
えっ？何それ？二つ名？要らないんだけど…
「誰だ？それ付けたの…まぁいいや、取り敢えず喰らっとけ『魔法の射手　収束・雷の１０１矢』！！」

前回の戦いから一週間経った。
今はラカンと詠春を連れてきて作戦会議中だ。
「今度はこっちから仕掛けるぜ！」
親父が言い放つ。
「良いですが…敵の居場所は分かっているのですか？」
アルが親父に訊ねる
「それは…」
分かってないのかよ！よく自信満々に、こっちから…とか言えたな！
「場所ならタカミチから聞いておる。《墓守の宮殿》じゃ。」
おお～さすが母さん。
「あそこで戦うならアレが居るはずですね…」
造物主か…
「そうなると、ナギにはアレの相手をして貰う事になるな。」
詠春が頷きながら言う。
「後はセクンドゥムが面倒ですね。あの肉体雷化は普通ならさわれません。」
あれ？確か原作だとフェイトに殺されて居ないんだよな…
「そうなのか？アスカは普通に蹴っ飛ばしておったが…」
アルの言葉に母さんが言う。
「多分バクキャラだからでしょう。取り敢えずセクンドゥムに攻撃を加えられ無いので、私とアリカ様は無理ですね。」
「親父もアレと戦うから無理だし、鍵持ちだからラカンも無理。」
「そうするとアスカか詠春の2人に限られますね。」
アルが俺と詠春を見ながら言う。
「じゃあ、俺とアスカでアーウェルンクス2人をどうにかしよう。」
詠春が言う。
「んじゃあ俺は火の嬢ちゃんだな。」
さっきまで話に加わっていなかったラカンが言う。
「では私はディナミスを。大戦の時に戦いましたからね。」
「そうすると妾は必然的に水じゃな。」

墓守の宮殿に入ると、セクンドゥムを含む5人が待って居た。
原作と同じならフェイトに殺されているはず何だが…イレギラーか！
［予定道理、俺は造物主を探して潰す！此処は頼むぞ！］
親父は念話すると同時に駆け出す。
［テルティウムを任せた！］
［分かった！］
詠春に念話を送り戦闘に入る。
「一週間ぶりだな、アーウェルンクス！
『魔法の射手　雷の千一矢』！」
「クッ！無詠唱の初歩魔法でこの威力…！」
フェイトは障壁で防ぎながら避け、セクンドゥムは肉体雷化を発動させ避ける。
それを見て、俺は前回の戦いからの一週間、ダイオラマ魔法球『夏の離宮』を使って作り出した身体強化魔法を使う。
「いくぜ！！
【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク！】
『戦いの旋律・雷』！！」
雷を鎧の様に体に纏う。
「何をしようと、キサマのようなガキでは私は捕まえられない！！」
「それはどうかな？」
雷の速度で後ろに回り込んできたセクンドゥムに拳を叩き込む。
「何！？」
攻撃を受け、体が一瞬止まった隙に後ろに回り込み蹴りを放つ。
「グッ！私と同じ速度だと！？」
なんかホント咬ませ犬っぽい奴だな…
「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク、目醒め現れよ、燃え出づる火蜥蜴！火を以てして敵を覆わん！】『紫炎の

捕らえ手』！！」
完全詠唱の捕縛魔法を発動させ、セクンドゥムを捕らえる。
「この程度十秒有れば抜け出せる！！」
「その十秒で叩き潰す！
【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク、九つの鍵を開きて、レーギャルンの筐より出て来たれ！】『燃え盛る炎の神剣』！！」
手に超高密度に圧縮した炎の剣を作る。
「バカな…超高等呪文だと！？」
「さっきから同じ様な事しか言ってねーな、オイ！」
そう言いながら『燃え盛る炎の神剣』を振り下ろすが寸前の所で避けられる。
「おのれっ！！
【ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト、イグドラシルの恩恵を持って、来れ貫くもの！】『轟き渡る雷の神槍』！！」
俺の剣とセクンドゥムの槍がぶつかり合う。
「【ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト…】」
「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク…】」
同時に始動キーを唱える。
「「【契約に従い、我に従え、高殿の王！】」」
互いに剣と槍を破棄して殴り合いながら詠唱をする。
「「【来れ、巨人を滅ぼす、燃え立つ雷霆！百重千重と重なりて、走れよ稲妻！】」」
詠唱が終わると同時に後ろに下がり雷系最大の呪文をぶち込む。
「「『千の雷』！！」」
千の雷が発動するとすぐに別の呪文の詠唱にいる。
「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク、契約に従い、我に従え、火の精霊！集い来たりて、敵を討て！】『紅蓮蜂』！！」
未だ煙が晴れていないセクンドゥムが居る方向に放つ。

「グガァァァ！？」
爆発音と共にセクンドゥムの悲鳴が聞こえる。
煙が晴れるとそこには、下半身と右手を失い地面に倒れているセクンドゥムがいた。
「バカな…造物主の使徒たるアーウェルンクスの私が人間のガキに負けるなど…」
俺を睨みながらそう言うのを無視して近づく。
「じゃあな、人形。」
そう言ってセクンドゥムの頭に『紅き焔』をぶち込んで燃やし尽くした。

セクンドゥムを倒して直ぐに、俺は詠春の元に向かった。
「詠春！！」
「アスカ！？セクンドゥムは倒したのか！？」
「ああ！テルティウムは俺が引き継ぐ！詠春は親父の援護に向かってくれ！」
「大丈夫か？」
「ああ…だが流石にアレと戦うだけの魔力は残って無い。」
「…分かった。死ぬなよ！！」
そう言って詠春は親父の魔力の方へ向かう。
「もう良いかな？」
「悪いな待ってて貰って。」
そうテルティウムに返事をする。
「まさかセクンドゥムを倒すとは思ってなかったよ。」
そう言いながらテルティウムは石の大剣を作る。
「正直死ぬかと思ったがな。」
俺は先程破棄した『燃え盛る炎の神剣』を再び作る。
一瞬で間合いを詰め剣を振り下ろす。

「君はどうしてそこまで頑張れる？この世界の秘密を知っているのだろう？」
「ふん！知っているさ！貴様等がやろうとする事の理由もな！！」
まずいな…魔力がかなり少なくなって来ている…
「ならば何故戦う？力ではどうしようもないのも、分かっているのだろう？」
「はん！だからどうした！人間舐めんな！！」
そう言いながら渾身の一撃を振り下ろし、石の大剣を砕きフェイトを吹き飛ばす。しかしその反動で太陽の如き剣も炎に戻ってしまう。
「くっ！
『千刃黒曜剣』！！」
体勢を崩した俺に向かって無数の黒い刃が襲いかかってくる。
「ちっ！ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ直伝！
『千条閃鏃無音拳』！！」
直ぐに体制を立て直してポケットに手を入れ、千の無音拳で黒い刃を叩き落とし、さらに障壁を破壊する。
「『千の雷』！！」
止めに無詠唱で雷系最大の呪文を決める。
「はぁ、はぁ、はぁ、やったか？」
これで終わったら、楽なんだが…
-ゾク！！-
突然寒気に襲われる。と次の瞬間、後ろから腹を何かに貫かれる。
「ゴフッ！」
口から血を吐く。
「「「アスカ！！」」」
倒れそうになる体に力を入れ後ろを向く。
「親父…いや、造物主か…」
クソ…結局こうなるのかよ…親父…
「待って居れアスカ！直ぐそちらに行く！」
母さんの声が聞こえる。

「我が使徒を2体も倒すとは…素晴らしい才能だ、我が末裔よ…」
造物主が一瞬で目の前に現れ、首を掴む。
この距離なら…
「【……】」
「声が小さいくて何を言っているか分からんぞ？」
「テメェ…がいくら強く…ても…この距離なら…少しは効く…だろ？」
造物主の手を思いっきり掴む。
「キサマッ！？」
造物主が慌てて離れようとするが…
「零距離…『千の雷』！！」
そこで俺の意識は途絶えた。

VS完全なる世界（後書き）

『戦いの旋律・雷』

戦いの旋律を基にアスカが改良した肉体雷化魔法（未完成）。

出力はスピード以外は通常の戦いの旋律と同じな為、闇の魔法に比べかなり劣る。

戦いの後（前書き）

かなり短いうえに独自設定があります。

戦いの後

目覚めると俺はベットに寝かされていた。まぁ取り敢えず、
「知らないｔ「天井ですか？」…」
アルに邪魔された…
「やっと起きたか。」
あっ詠春まで居る。
「体の方は大丈夫ですか？」
体を起こしてみる。
「ああ、少し鈍っているが大丈夫だ。」
「それは良かった…」
詠春が言う。
「今は何時だ？あれからどうなった？」
「あれから二週間ちょっとですね。」
アルが、いつになく真面目な様子で話し始めた。

「要約すると…俺の一撃で造物主が怯んだ、その御陰で一瞬だけ親父の意識が戻った。
んで、その隙に母さんが特殊術式で親父と造物主を封印、その後遺症で昏睡…って事か？」
「多少違いますが、大体合ってます。」
まぁ多少なら良いか。
「ちなみに、ナギとあなたは戦闘で死亡…と言う事になってます。」
俺もか…好都合だな。
「なら、そのまま死亡した…って言っといてくれ。」
「…理由を聞いても？」
アルが訝しげに聞いてくる。

「メガロがウザい。」
「なるほど。しかしそれだけでは無いでしょう？」
流石に鋭いな。
「…親父達を取り戻す。その為には力が要る。」
「その為に雲隠れする…と？」
「そうだ。つーか此処は何処だよ。」
「旧世界にある麻帆良学園の世界樹の根元ですよ。」
ああ、古いゲートが有るとこか…
「それでこれからどうするんだ？」
「まずはリハビリだな。その後は、新呪文の開発をために、もう一度セラスの所に行く。
それにコレも解析したいしな」
そう言いながらある物を取り出す。
「なっ！？」
「造物主の掟（コード・オブ・ザ・ライフメイカー）！？何処でそれを！？」
詠春とアルが驚く。
「セクンドゥムを倒した時に奪った。」
「「……」」
「取り敢えず、落ち着いて体を回復させたい。」
唖然としている2人を無視して話を進める。
「なら最初は俺の所に来ないか？」
「詠春の所？関西呪術協会か？」
いち早く復活した詠春が言う。
「ああ。」
「大丈夫なのか？」
「ああ、俺が何とかする。それに体を鍛えるなら神鳴流が有るしな。」
それは嬉しいんだけど…
「で俺に何をして欲しいんだ？」
「…さすがだな。俺の娘の遊び相手と護衛をして欲しい。」

娘…木乃香か。
「別に良いぞ。もう普通の運動ぐらいなら大丈夫だし、直ぐに出るか？」
「ああ、なるべく早く戻らないといけないしな。」
忘れそうだけど、長なんだよね…
「分かった。あと2人の姿を見たいんだが…」
通じないとは言え、挨拶したいしな。
「こっちですよ。」
アルと奥の階段に向かう。

「これが…」
「ええ、封印です。」
そこには結晶に封じられた親父…造物主が居た。
「必ず助けるからな…親父…」
「…アリカ様の体はこのさらに下の階です。」
アルの後に続き下に降りる。そこには透明の棺のような物の中で眠る母さんが居た。
「…いつ目覚める？」
「分かりません…すぐに目覚めるかもしれませんし、目覚めないかもしれません。」
「そうか…」

俺と詠春が出発しようとしていると、アルが話しかけてきた。
「アスカ、渡す物が有ります。」
「何だ？」
アルに向き直る。

「これです。」
アルが布に包まれた何かを渡してくる。
布を外すと…
「王剣…」
「ええ、アリカ様から渡してほしいと。」
母さん…
「雲隠れするならあまり使わない方がいいでしょう。」
「分かってる。」
「お～い！そろそろ行くぞ！」
あっ詠春が呼んでる。
「2人を頼むぞ、アル。」
「ええ、分かってますよ。」
そう言ってアルと別れた。

戦いの後（後書き）

ヒロイン誰にしよう…木乃香と姫子ちゃん（アスナ）は確定してるんだけど…

候補としては、刹那・さよ・夕映かな？

エヴァは友人として、後は…予想外を狙ってセクストゥムとアーニャ（笑

関西にて（前書き）

この小説ではネギは1月生まれで造物主を封印したのは2月頃…のつもりです。

関西にて

麻帆良を出て直ぐ、髪の毛の色を赤から黒に染めた。母さん譲りのオッドアイはそのままにしている。
「そろそろ着くぞ。」
「う～い。」
運転席から詠春の声に返事をして降りる準備を始める。
「ほれ、着いたぞ。」
「うわぁ…」
階段ながっ！漫画で見て知ってたが、実際に見ると凄いな…
「そう言えば名前はどうするんだ？」
階段を上りながら詠春が聞いてくる。
「名前か…」
…春原？
「無いな。」
「何がだ？」
おっと、声に出ていたか…
そうだな…
「よし！決まった！」
「何にしたんだ？」
「造物主（カミ）の子孫にして、造物主（カミ）を殺す者…火産霊飛鳥（ほむすびあすか）だ。」
そう言った時ちょうど門が見えてきた。
その門をくぐると…
『お帰りなさいませ、長！！』
沢山の巫女さんが居た。

「おかえりなさい！とーさま！」
「ただいま、木乃香！」

詠春が走ってきた少女を撫でる。
「ん？とーさま、この子は？」
「ああ、彼は…」
「俺は火産霊飛鳥、よろしく。」
「ほむすびあすか？ならあっくんやね。」
「あっくん…」
詠春の言葉を引き継ぎ自己紹介をする。
「これからしばらく一緒に暮らすから仲良くして上げなさい。」
「は～い！よろしくな、あっくん！うちのことはこのちゃんってよんでな～」
木乃香とのファーストコンタクトはそんなこんなで終わった。

関西呪術協会に来て半年経った。神鳴流の技を幾つか所得し、捕まえた死客の数は既に５０を越えている。
「あっくん、み～つけた！」
「見つかっちゃったか…せっちゃんは？」
ちなみに今は木乃香&刹那とかくれんぼ中です。
えっ？呼び方？いや、せっちゃんって呼ばないと木乃香が怖いんだよ…
「まだやで～いつものとこで、まっといてな～」
そう言って木乃香は刹那を探しに行った。
直ぐに中庭の縁側に腰を下ろす。
「ふう…」
「お疲れさま。いつも悪いな、アスカ。」
いつの間にか現れた詠春も隣に腰を下ろす。
…なんか顔が暗いな…
「どうした？」
「…やっぱり分かるか？」

「分かるに決まってんだろ。俺はお前の大親友の息子だぞ？」
「そうだな…少し聞いてほしい…」
そう言って詠春が血を吐くような顔で話し出す。
「なるほどな…やっぱりあれだけの力を持った子を産むと、体も弱くなるか…」
「ああ…もって半年、早ければ今月らしい。」
詠春の話は木乃香の母親…木乃美さんの体調に関してだった。
元から体が強いと言う訳では無かった上に、莫大な魔力を持った子供を産んだ為に体が弱くなってしまったらしい。
原作に出てこない理由がようやく分かった。
「…木乃美さんも合わせて話がしたい。」
「体についてか？」
「ああ、少しでも役に立ちたいからな。」
「…分かった。食事の後に話そう。」
そう言うと詠春は去っていった。

「じゃあ、いきますよ。」
「はいな。」
「【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク、……】」
横になっている木乃美さんに解析魔法をかける。
「……なるほど…」
「何か分かったのか？」
「ああ、結論から言えば手はある。」
「本当か！？」
詠春が身を乗り出して聞いてくる。
「少し落ち着け、顔が近い近い。」
「そうやで？」

「すまん…」
俺と木乃美さんに言われ詠春が体を引く。
「それで？本当に治るのか？」
「ああ、どうやら魔力を生成する器官が膨大な魔力で焼き切れたらしい。これなら治癒魔法で何とかなる。ただ…」
「ただ？」
「時間が足りない。これだけ派手にやられていると術式を特別に作らなきゃならないからな…」
「何とかならないのか？」
「…ダイオラマ魔法球に籠もる。それと術式完成後に治癒術士を数人借りたい。」
「そんなことしたら正体が…」
「分かった。」
「詠春はん！」
木乃美さんの言葉を遮るように詠春が了解する。
「じゃあ、俺はこれから準備をするから。」
そう言ってその場から立ち去る。
「はぁ…木乃香達に一ヶ月遊べない理由、何て説明するかな…」

『夏の離宮』に入り３６０日、現実世界の時間で１５日たった。
今は術式を簡略化させる作業をしている。
「えっと…これはこうか？んで、こっちが……出来た！！」
完成した術式を記録し、直ぐに『夏の離宮』から出て、そのまま詠春の部屋に向かう。
「詠春！完成したぞ！！」
「本当か！？」
「ああ、今から場所を作る術士を四人ほど貸してくれ。」
「わかった。」

詠春は直ぐに連絡を取り始める。
「俺は先に祭壇に行く。」
そう言い残して部屋を去った。

関西にて（後書き）

・火産霊とは
カグツチの別名。
誕生時、イザナミの陰部に火傷を負わせ殺した火の神。
創造神から生まれ、創造神をを殺した神様。
もっとも、その後怒り狂ったイザナギに殺される。

新たな肩書（前書き）

はっはっは！！この展開は誰も予想していなかっただろう！！
……いや、マジすいませんｏｙｚ
なんか調子のって書いてたらこうなったんです。
それにしても…毎度毎度かなり短いな…

新たな肩書

「もう一回言って貰えるか？」
木乃美さんの治療は無事に終わり、一ヶ月経った。体力も回復し、もう殆ど木乃香を産む前と変わりないらしい。
木乃美さんの回復が確認され、治療した俺はその件で関西呪術協会の幹部会に連れて行かれただが…
「だから、火産霊飛鳥を関西呪術協会の幹部として迎えることが決定しました。」
幹部会だからなのか、詠春が敬語で話しているが関係ない。
「いやいやいや！俺は西洋魔術師な上にスプリングフィールドの人間だぞ！？」
「だから勿論拒否権はあります。」
「そー言う事じゃなくて、アンタらは良いのかって事だ！！」
「それを今さら聞くかの？少し落ち着きぃ。」
幹部の中に居る老人５人の内の１人…第二席の橘翁が言う。
「ふぅ…落ち着いてきたので説明をお願いします、長。」
深呼吸をしてから嫌みっぽく詠春に問う。
「ええ…このたび近衛木乃美殿の体調が回復した事を受け、彼女が近衛家当主、並びに関西呪術協会幹部・第三席を近衛近左衛門殿より引き継ぐことが決定しました。」
詠春が一瞬間を置く。
「それに伴い現在空席となっている第十二席の補充の為、最も相応しいと思われる者を選別した結果、多くの刺客の撃退と近衛木乃美殿の治療を行ったアスカが召還されました。」
なるほどな…恨みを打ち消して余るほどの功績か…
「それに何も普通の幹部の仕事をして欲しいわけではありません。」
「…どういう意味ですか？」
「ウチらには現在、魔法世界に後ろ盾がおらんのや。」

第五席の鶴子師範（そう呼べと言われた）が口を開く。
「はぁ…」
「そやけど、関東…いやメガロメゼンブリアに対抗するには、どうしても魔法世界の後ろ盾が必要なんや。」
「よってアスカ君には魔法世界との橋渡し役として、帝国との話し合いの責任者になってもらいたいんや。」
この中で幹部の中で最も若い第六席の一条さんが言葉を引き継ぐ。
「勿論ただでとは言いません。関西呪術協会本山と各地の支部の禁書クラスの閲覧を許可をします。」
禁書クラスの閲覧許可…断る理由はないな。
「承知いたしました。謹んでお受けいたします。」

「…まさか幹部入りとはね…」
幹部会が終わり、現在は詠春と話している。
「すまんな…負担を増やすことになって。」
「別に良いよ。幹部と言っても肩書きだけだからな。にしても刺客を捕まえて治らないと思われていた女性を救っただけで幹部入りか…」
「それだけ木乃美がみんなに慕われてるって事だよ。俺には勿体ない嫁さんだよ、ホントに。」
「何だ？惚気か？」
しみじみと言う詠春をからかう。
「違う！！…だが本当にアスカには感謝してる。」
「なら十倍ぐらいにして返してくれよ。」
「ああ、任せてくれ。」
「期待してるぜ、長。」

新たな肩書（後書き）

アスカの正体を知っているのは幹部クラスだけです。

説得（前書き）

かなり短いです。すいませんｏｙｚ

説得

「あっくん～あさやで～！」
「う～ん…」
「あ～さ～や～で～」
-ゴス-
「いてぇ！？」
「やっとおきた～」
叩き起こされて最初に目に入ったのは、トンカチを持って俺の上に跨っている木乃香だった。
「このちゃん…そのトンカチで殴るの止めてくれない？」
「え～…あっくんがしっかりおきるんやったらええよ～」
「…頑張ります…」
「きょうはな、ひさしぶりにかーさまが、ごはんつくったんやで～」
木乃香が嬉しそうに言う。
木乃美さん大分体力も回復したな…
「じゃあ、急いで行くから先に行ってて。」
「わかったぇ～」
木乃香が部屋から出たのを確認してから、着替え始める。
「そう言えば、悪魔の襲撃って何時だっけ…」
運が良ければ親父に会えるかもしれないし…

朝食が終わり一息ついていると木乃香と刹那がやってきた。
「あっくん！おにごっこせえへん？」
「鬼ごっこ？いいよ。」
「ほな、きょうはあっくんがおにな！」
そう言うと木乃香は刹那の腕をとって走っていって仕舞った。

「はぁ…えっと、い～ち！に～い！さ～ん！……１０！！」
数え終わると木乃香たちより少し早いスピードで走る。
「そっちは川の方だから…しまった！！」
木乃香が溺れるイベントか！！
「クソったれ！！」
全力を出して走る。
「せっちゃん…助けて…」
「このちゃん！このちゃん！いまたすけるけん！」
川の方から悲鳴に近い声が聞こえてくる。
「ちっ！迷ってる暇は無しか！
【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスム・ヴィヴゥス・ヴィク！】『戦いの旋律・雷』！！」
肉体雷化を利用した瞬動…雷速瞬動で一気に川岸に行き、虚空瞬動を利用して木乃香と刹那を助け出す。
「あっくん…うち…「…ゲホッ！ゲホッ！」このちゃん！」
木乃香と刹那を川岸に下ろし詠春に念話を入れる。
［詠春！緊急事態だ！木乃香達が川で溺れた！］
［本当ですか！？］
［ああ、もう助けたがびしょ濡れだ。］
［分かりました！直ぐにそちらに行きます！］
「ふ～う…」
思わず魔法を使ってしまったが…まぁ、バレてないみたいだからし良いか…

現在、幹部の召集をうけ長を待っている所だ。
あの事件の後、原作道理に刹那が木乃香を避け始めた。何とかしようとしているのだが、俺が何を言っても通じない。
どうしようか考えていると詠春が入ってきた。

「突然呼び出してすいません。」
「ええから…呼び出した理由を言いや。」
三条翁が不機嫌そうに言う。
「分かりました…単刀直入に言うと、来年度から木乃香を麻帆良に送りたいと思います。」
やっぱりか…でもそんな事言ったら…
「なんやと！？」
「正気ですか！長！」
「何を考えてるんですか！！」
ほ～ら、強硬派の皆様が怒り始めた。
まぁ新参者の俺が口を挟むなんて事は出来ないし…
「オイ！火の字！お前さんは何とも思わんのか！」
マジで！？俺に振るか！？
「…俺としては、まずは理由を伺いたいんですが。」
知ってるんだけど…
ちなみに幹部会の時は一様丁寧語にしている。
「…そうやね…長。」
鶴子師範が詠春の方を見る。
「…私は出来るだけ木乃香に此方側に関わって欲しくないんです。幸いにも義父さん「長、その呼び方はどうかと思います。」…近右衛門殿も了承してくれています。」
木乃美さん、こわっ…目が笑ってないし…
「…儂らにそれで納得せぇと？」
「……」
「それに裏切り者の所など…利用されるだけじゃ！！」
詠春の周りは敵ばっかりだな…長なのに…
「木乃美は良いのですか？」
いままで黙っていた女性…二条さんが木乃美さんに問う。
「…私は近右衛門殿が嫌いなので。」
うわ～スゲー良い笑顔。

「ぼーず、なんか意見出せや。」
「無茶言わないでくださいよ、不知火のじぃさん…いきなり思いつく訳ないでしょ。それに俺はペーペーの末席ですよ？発言していいんですか？」
「構わん構わん。若いもんの意見を聞きたいんじゃ。捻り出せや。」
「なら一条さんでも良いじゃないですか…はぁ分かりましたよ。」
古参の一人、不知火翁に言われしばらく考え込んでから話す。
「まず、お嬢を此方の世界に関わらせないのは無理でしょうね。しかし、長の親心を無視するわけには行きません。なので条件を付けてはどうでしょう？」
「条件とな？」
「はい。一つ目は秘密にしておくのは中学入学まで。二つ目は中学入学時に護衛と先生役を送り、陰陽術を学ばせる。」
そして一息間を置き。
「最後に関東には、こちらからの留学生として…つまり、関西の人間として送る。これでどうでしょう？」
そう言って周りを見渡す。
「…儂はそれなら構わん。」
筆頭である三条翁が納得したことで、強硬派は了承。
詠春は最後まで渋っていたが木乃美さんの一喝で了解した。

「いやや、いやや！あっくんたちとおる！！」
「そう言わないで…俺も来年から他の場所に行かなければならないんだし…」
「むう～」
現在なぜか俺が木乃香の説得をしている。
「じゃあ、休みの時は一緒に居てあげるから…」
「むう～」

「じゃあ…小学校の間、我慢できたら何でも一つお願いを聞いてあげる。」
「ホンマか！？」
「うん。」
「ほんなら行く！！」
説得成功…なのか？

説得（後書き）

関西呪術協会幹部一覧

第一席　　土御門
幹部会の時以外はふらふらしていてあまり見かけない。水行を得意とする。

第二席　　橘
人当たりの良さそうなお爺ちゃん。結界系を得意とする。

第三席　　近衛木乃美
近衛近右衛門の娘。普段はほんわかしているが、いざと言う時はしっかり者。治癒系を得意とする。アスカを推薦した人その1。

第四席　　三条
強硬派の筆頭。いつも不機嫌そうな顔をしている老人。相手の名前を『～の字』と呼ぶ。火行を得意とする。実はアスカを推薦した人その2。

第五席　　青山鶴子
神鳴流の師範代。アスカに神鳴流を教えている。

第六席　　一条
飛鳥が入ってくるまで最年少の中学生幹部だった。歳の近いアスカの事を気に入っている。金行を得意とする。

第七席　　安藤
最年長の幹部。召還を得意とする。そろそろ引退したいらしい。

第八席　　不知火
古参の一人。土行を得意とする。

第九席　　二条
三人居るの女性幹部の一人。諜報活動に秀でた忍者。木乃美の親友。

第十席　　島津
高校生ぐらいの女性。かなり優秀な人形使い。

第十一席　桐原
古参の一人。木行を得意とする。

第十二席　火産霊飛鳥
西洋魔法使い。魔法世界担当の最年少幹部。陰陽術も得意。

元・第三席　近衛近左衛門
近右衛門の弟。歳で引退。

元・第十二席　天崎
千草の父。大戦で死亡。

基本的に数字で優劣は決まりません。イメージとしては、結界師の十二人会
出てこない人も居るかもしれません。

閑話　刀作成（前書き）

遅くなってすいませんｏｙｚ

閑話　刀作成

「う～ん…」
「どうしたんだ？アスカ。」
道場で座禅を組んで悩んでいると後ろから声をかけられた。
「詠春…最近、自分の刀が欲しくなってきたんだ。」
「『王剣』が有るじゃないか。」
「あれは普段使えないし…」
「じゃあ、普通に作って貰ったら良いんじゃないか？」
「いや…それだと詰まんないんだよね…」
「なら自分で作るとか…アスカは魔法使いだし…魔剣とか作れるんじゃないか？」
詠春が、冗談だがな。とか言う。
「…魔剣か…」
あれ？そう言えば俺って魔法具を創る才能も貰ったんだっけ…
「よし！作るか！」
「…おい！冗談だろ！？」
詠春が何か言ってるが無視して、神鳴流剣士専門の鍛冶屋の元に向かった。

鍛冶屋で作り方を学んだ後、『夏の離宮』に入り作り始める。
「作るって言っても難しいな…まずは漫画とかのでも作るか！」
と言っても強すぎると詰まらないし…そうだな…
候補はとしては、『時雨金時』『山本のバット』『祢々切丸』『魔王の小槌』『心鬼紅骨』『斬魄刀』『一護の完現術』『贄殿遮那』『浪漫の結晶ドォーリル付き西洋風の両手剣』『神裂の令刀』『物干し竿』『六幻』『ニバンボシ』ｅｔｃ…

え？刀じゃないのが有るって？…気のせいだ。

結局、悩み抜いた末に『贄殿遮那』に決定した。ただし長さは普通の刀と同じにし、鍔を無にした。
まぁここまでは良かったのだが、ここからが問題だった。
案外早く出来てしまったため、もう一本作ることにしたのだ…いや、してしまったのだ。
どうせなら妖刀創らね？って事になり『魔王の小槌』を創ることにしたのだが…
ヤバい…かなりヤバい…
斬った相手の魔力や気などを吸収して自分の妖力に変換し、挙げ句の果てに使用者の心まで蝕んでいく…正真正銘の妖刀だ。
…取り敢えず詠春と鶴子師範に判断を仰ぐことにしよう。

「「この大バカもん！！」」
「いてぇ！？」
殴られた…気で強化して思いっきり殴られた…
「何て物を創ってんだ！！」
「『ひな』の比やあらへん物創って…！！」
すげぇ怖い…
「…遊び心でつい…」
「つい…ですむか！！」
「いや…かなり反省してるって。」
「はぁ…反省しとる様やしもうええ…それと長？これは神鳴流で『ひな』と一緒に封印するけどええか？」
「そうですね…お願いします。」

封印処理が終わり、道場で鶴子師範と向かいあっている。
「よし、ほんならアスカの刀見せぇ。」
「これです。名前は『贄殿遮那』。」
影の倉庫から取り出しながら言う。
「これは！？…かなりのもんやな…流石あのバケモン妖刀創っただけのことはあるな…」
「ありがとうございます？」
何か誉められたんだか呆れられたんだか分からない反応だな…

閑話　刀作成（後書き）

『贄殿遮那』
基本的には原作と同じ。ただし、長さは普通の日本刀と同じで鍔が無い。
作成段階で『王家の魔力』を混ぜ込んであり、刀本体に対する魔法や気を一切無効化する。（ただし『王家の魔力』を持つ者のは無効化されない。）
同じ方法で鞘も作られた。

『魔王の小槌』
刀自体に意思が宿っていて、斬った相手の魔力や気などを吸収して自分の妖力に変換する。最終的には使用者を乗っ取る。
やってみたら出来ちゃった妖刀。

協定締結（前書き）

随分とご無沙汰ですいませんｏｙｚ
気が付いたらお気に入りが１００件を超えてたとか…
本当にありがとうございます！！

協定締結

木乃香が麻帆良に行ったのに合わせて、俺は帝国のテオドラに会う為、魔法世界に向かった。
「こっちも久しぶりか…」
「ああ、そう言えば火産霊第十二席は来たことがあるんでしたね。」
「何度も言うが呼び捨てで良いし、丁寧語も止めてくれ。」
今話しかけてきたのは今回の旅の共、橘翁の孫娘…橘青葉だ
「流石に幹部を呼び捨てなんて出来ませんよ。」
「嘘付け、一条さんのことよびすてじゃねぇか。」
「まぁ、幼なじみですし？」
「何で疑問系なんだよ…っと着いたな。」
葵と話している内に城の前に来ていた。
「ほぇ～」
「すいません、今日テオドラ陛下と会談の予定をしていた者なんですが…」
アホみたいな顔をしている奴を無視して門番に話しかける。
「名前は？」
「関西呪術協会幹部　第十二席　火産霊飛鳥。」
「今確認を取ります。」
門番が何処かに念話をとばす。
「確認がとれました。案内が来るまで少々お待ち下さい。」

テオドラとの会談は無事に終わり、同盟を組むことに成功した。
此方から出すものは陰陽術の知識や技術、その見返りは魔法の知識や技術。そしてお互いの世界の情報の共有と協力…それが協定の内容だ。

…もっとも、まだ俺の用事は終わってないが。
「…テオドラ様、少しお時間を貰ってもよろしいでしょうか？」
「うむ、かまわぬ。」
「少し見ていただきたい物があります。」
「何じゃ？」
「これです。」
そう言って影から『王剣』を出す。
「っ！？」
武器を出したのを見て護衛の人達が警戒態勢を取るが…
「武器を下ろすのじゃ。」
こっちが武器を仕舞ったのを見ると向こうも武器を下ろす。
「少し、この者と二人で話したい。」
「しっしかし…」
護衛の言葉を無視して部屋に入る。
「久しぶりだな、じゃじゃ馬姫。」
「お主は死んだと聞いておったんじゃが？千の呪文を継ぐ者。」
「それには色んな訳があるんだよ。」
「その訳を聞かせて貰えるんじゃろうな？」
テオドラが睨みながら言う。
「ああ、でも何度も話すのは面倒だから、セラスと一緒でも良いか？」
「構わぬが…いつじゃ？」
「一週間後、ラカンの隠れ家で。」
「わかったのじゃ。」
さて、次はセラスの所に向かうか…

協定締結（後書き）

橘青葉

関西呪術協会幹部　橘の孫娘

一条の幼馴染で同級生

現在は飛鳥の部下的立ち位置

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5524y/

ネギま　千の呪文を継ぐ者

2011年12月18日11時54分発行